

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ユカタン・マヤ社会における祭礼ハビトゥス

タイトル(その他言語)	El habitus de hacer la fiesta de los pueblos yucatecos
著者	吉田 栄人
雑誌名	神戸市外国語大学外国学研究
巻	60
ページ	103-132
発行年	2005-03-29
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000665/

ユカタン・マヤ社会における 祭礼ハビトゥス⁽¹⁾

吉 田 栄 人

はじめに—ハビトゥスとしての祭礼主催義務の引き継ぎ

人間の行動は、事前にであれ、事後的にであれ、所属する社会の規範を常に参照するという点において、ピエール・ブルデュのいうハビトゥスとして生起する。すなわち、人間の行動は、上の世代の仲間あるいは自らの過去がある種の生活条件の下に確立してきた一定の性向によって、あたかも個人に染みついた癖であるかのように構造化され、また次の世代あるいは自らの未来の行動を再帰的に構造化していく。たとえば、祭礼主催職の引き継ぎは決して主催者（前任者）とその後任者との間の一回限りの行為として終了するのではなく、祭礼が毎年実施される限り、繰り返し行なわれるものである。しかも、繰り返し行なわれる引き継ぎ行為は決して無作為なものではなく、必ず前例をモデルとしている。それは必ずしも伝統としての前例を繰り返すこと（あるいは前例に背くこと）が社会によって義務づけられているからではない。むしろ、人間は同じ行為を繰り返す際に、記憶を通じて必ず前例なるものを回顧するからであろう。そして、参照点となった前例は反復行為の内にパターン化され、伝統（構造）としてついには行為の自由を制限するようになる。このように一定の性向を持ち構造化された人間の行動様式がハビトゥスである。

メソアメリカ地域の先住民社会におけるカトリックの祭礼では、開催義務（スペイン語でカルゴと呼ばれる）は通常1年任期で引き継がれる⁽²⁾。しかし、今日のメキシコでは、いわゆる村祭りの企画運営は、各市町村役場の所管する

ところとなっており、祭礼の責任者は役場からボランタリーグループに委任されるか、希望者に祭礼開催権が競売によって売却される。そのため、役場（すなわち行政組織）と祭礼組織とが社会構造上、重なっている極めて例外的な事例⁽³⁾を除いて、祭礼主催の権利ないしは義務が前任者から後任者に直接引き継がれることはなくなっている。ユカタンにおいても事情は同じであるが、祭礼期間中、村祭りの組織とは別個に祝祭を行うグレミオ(gremio)と呼ばれる信徒集団では祭礼開催義務の引き継ぎを儀礼的行為を伴って実施しているものが多数存在する。しかも、その儀礼の個々の要素は、引き継ぎを行なわないグレミオにおいてもユカタン祭礼の伝統を継承していることが多い。祭礼職の引き継ぎをめぐるこうした実践はあるハビトゥスの下で実践されているはずである。そこで、本稿では引き継ぎ儀礼の比較を通じて、ユカタン・マヤ社会の祭礼ハビトゥスについて考えてみることにしよう。

詳細な議論に入る前に、ユカタン・マヤ社会の祭礼における主催職の伝統的な引き継ぎについて述べておこう。ユカタン・マヤの祭礼では、祭礼の主催者は祭礼の実施にあたって通常豚1頭を提供しなければならないとされる。そのため主催者になることが決まると、彼らの多くは子豚を購入し、1年間をかけてその子豚を大事に育てていく。この子豚は聖人聖母に捧げられるものであるため、他の村人の妬みによって死ぬことは決してないと言われる。祭礼において豚はチチャロン（皮の唐揚げ）やフリホル・コン・プエルコ（豚肉入り豆の煮込み）などに料理され、祭礼の実施に協力してくれた人たち全員に振る舞われる。しかし、豚の頭だけは丸ごと地下蒸し料理にされ、次の年の主催者に渡される。祭礼主催の前任者から後任者への、この豚の頭の受け渡しには必ず「豚の頭」ダンスが踊られる。すなわち、ユカタン・マヤ社会では豚の頭が主催職の象徴であり、その受け渡しでもって主催職の引き継ぎが表現される。この豚の頭をめぐる儀礼がユカタンの祭礼を特徴づける大きな特徴すなわち伝統であると考えられている。それゆえ、役職の引き継ぎを行なわない場合でさえ、祭礼の「伝統」性を示すための重要なアイテムとして豚の頭ダンスを実施する

例はかなり存在するのである（拙稿 2002）。

ユカタンの祭礼主催職は「伝統」的にはこの豚の頭によって表象されることが確かに多い。しかし、ユカタン州の祭礼を実際にあちこち調査してみると、豚肉の料理は祭礼に必須のアイテムではあっても、主催職の引き継ぎに豚の頭ダンスを行なう事例は意外なほど少ないことに気が付く。また、豚の頭ダンスは行なわれていても、人々がそれを主催職の引き継ぎと結びつけて理解していない場合も多々ある。従って、今日主催職の引き継ぎには各村独自の定義と慣行が存在すると考える方が実態に即している。これは、豚の頭が本来表象してきた祭礼主催の意味合いが各村落において個々に変化してきたこと、またそれと同時に引き継ぎの表象の仕方が変化してきたを示すものであると考えられる。ここではその変化の歴史的プロセスを詳細に跡づけることはできないが、その表象の多様性の中にも反復される祭礼主催職の引き継ぎという構造を明らかにすることによって、ユカタン・マヤの人々の祭礼ハビトゥスを考えることはできるはずである。

I. 引き継がれるもの

主催職移動を表象するための多様な儀礼慣行を理解するためには少なくとも、前任者から後任者に実際に引き渡されるものは何か、また引き渡しはどの時点でもって完了したとみなされるのかの2点を検討する必要がある。

本節ではまず最初に実際に引き継がれるものにはどのようなものがあるのかを検討しよう。引き継がれるものといっても、実際には二つのタイプのものがある。議論を簡素化するためにここでは事例をグレミオだけに限定するが、グレミオは一般にある種の共有財産を持っている。主催職の引き継ぎに当たっては通常この共有財産も引き継がれていく。たとえば、エスタンダルテと呼ばれるグレミオの旗がその典型的な例である。こうした共有財産は年月とともに傷んで使えなくなり破棄され、そして別のものに置き換えられる可能性はあるが、

基本的には同一物であり、それが主催者の交代の度に引き継がれていくことになる。これを第一のタイプとすれば、第二のタイプは同じ品物ではあっても、同一物ではないものである。たとえば、豚の頭がこれに相当する。ある主催者は前任者から豚の頭を受け取るが、1年後に自分が育てた豚の頭を次の主催者に渡す。つまり、カテゴリーとしては同じ豚の頭であるが、受け取る豚の頭と渡す豚の頭は同一物ではない。この第二のタイプの引き継がれるものは一旦消費というプロセスを介在させている点において、第一のタイプと決定的に異なっていると言えよう。では、実際にどのようなものが引き継がれるのか、その具体例を見てみよう。

1. 耐久消費財

グレミオは必ずカトリックの聖人聖母の絵を描いたエスタンダルテ（団旗）を所有している。これはグレミオが、信仰する聖人もしくは聖母への年1回のプロメッサとしてエスタンダルテ⁽⁴⁾を掲げて主催者の家から教会までプロセッショ⁽⁵⁾ンを行なうことを目的とした信徒集団だからである。エスタンダルテは聖人聖母の代理とみなされ、エスタンダルテを家に保管することによって1年間聖人聖母の庇護が得られると考えられている。エスタンダルテの迎え入れ・保管は祭礼の主催者だけが享受できる特権であり、グレミオのメンバーはいつの日か自らも主催者となることを願う。このようにグレミオはこのエスタンダルテに表象される聖人聖母への儀礼を行なうことを目的とした集団であるため、グレミオにとってエスタンダルテは不可欠な小道具である。また、エスタンダルテはビロードの布に聖人聖母の絵などを刺繍したものであり、作成にはかなりの費用を必要とするため、通常はグレミオを迎え入れる主催者が個々にエスタンダルテを作成することはない。むしろ、エスタンダルテはグレミオの共有財産として祭礼主催の前任者から後任者へと受け渡されていくのである。

ところが、グレミオの中にはエスタンダルテを特定の個人が所有している場合がある。⁽⁶⁾表1のツァン村の「聖人御降り」グレミオやムナ村の多くのグレミ

表 1 主催職の交代に伴って引き継がれるもの

グ レ ミ オ 名	村 名	エスタン ダルト	長持	ロウソク	その他の 共有財産	引き継ぎ 料理	約束料理	豚の頭	ラミジェテ	引き継ぎ儀礼	分類
"De la Bajada" (「聖人御降り」)	Dzan	○(個人 所有)	×	×	×	×	タコスと オルチャタ	○(プロメサ)	×	×	I
"13 de Enero" (「1月13日」)	Dzitás	○	×	○(一般会 員に貸与)	×	×	アロス・コ ン・レチエ	×	×	×	I
Labradores y Sastres (自作農と仕立屋)	Tekax	○	×	○	×	×	タコスと オルチャタ	○(プロメサ)	×	×	I
Comerciantes y Artesanos (商人と職人)	Ticul	○	×	×	×	×	タコスと オルチャタ	×	×	マニヤニータス：2日目早 朝	Ia1
"20 de Enero"(「1月20日」) Nohoch kuch	Dzitás	○	×	○	×	○*2	×	○	○	豚の頭 (ホッチリ) ダンス： エスタンダルト引き渡し後	Ia2
Campesinos (農民)	Chapab	○	×	×	×	豚の頭	?	○	?	豚の頭ダンス	Ia2
Jornaleros (日雇い労働者)	Tixpehual	○	○	○	花飾り	×	タコスと オルチャタ	○(プロメサ)	○(プロメサ)	豚の頭ダンス：ロザリオの 後/ホッチリ：2日目早朝	Ia2
Obreros y Agricultores (職人と農業従事者)	Xocén	○	×	×	×	○*1	×	○	○(プロメサ)	○(2回)	Ia2
Unión Católica Campesino (農民カトリック連合)	Cansahcab	○	×	×	×	×	タコスと オルチャタ	○	○(プロメサ)	ホッチリ (豚の頭ダンス)： 2日目早朝	Ia2
Mujeres de Campesinos (農民女性部)	Chumayel	○	×	○	×	×	タコスと オルチャタ	○(プロメサ)	×	カボ	Ib
Señoras y Señores (成人一般)	Tekantó	○	×	○	×	豚の頭	ボリータと オルチャタ	○	?	豚の頭ダンス：ロザリオの 後/カボ	Ib
"De Alborada" (「(祭礼) 幕開け」)	Santa Elena	○	○	○	食器	×	アロス・コ ン・レチエ	×	×	カボ、コーチェ	Ib/ VIb
San Isidro Labrador I (第一農民聖イシドロ)	Peto	○	×	○(会員保 管)	聖人像	×	タコスと オルチャタ	○(プロメサ 5月)	○(5月)	ラミジェテ (5月)	VIIIa
San Isidro Labrador II (第二農民聖イシドロ)	Peto	○	×	○	聖人像	×	タコスと オルチャタ	○(プロメサ 12月と5月)	×(12月)/ ○(プロメサ：5月)	豚の頭ダンス	VIIIa
Labradores (自作農)	Hunucmá	○	○	×	椅子	×	タコスと オルチャタ	○	×	○(5月頃)	VIIIb

*1) 1日目: k'ol (パケツ1杯), 鶏 (パケツ1杯), xtut (4個), コカコラ (2本), ラム酒 (3本), balché, ロウソク(4本), タバコ/2日目: relleneno negro

*2) k'ol, arepa, chorreadado, トルテイージャ, 豚の頭

オがその例である。これらのグレミオではグレミオの祭礼の実施に当たって、グレミオのメンバーが個人的に所有するエスタンダルテを持ち寄り、主催者の家で祭礼を実施した後、本来の所有者がエスタンダルテを自宅に持ち帰る。主催者はエスタンダルテのプロセッションを通じて聖人を一時的ではあるが自宅に迎え入れたその事実だけで満足しているようだ。なぜこのようなエスタンダルテの扱いが生まれたのか、歴史的な経緯は不明であるが、理由は想像に難くない。共有財産としてのエスタンダルテを作成するための資金がこれらのグレミオになかったため、特定のメンバーが個人的にエスタンダルテを作成したのだと考えられる。個人的に作成されたエスタンダルテであっても、グレミオに寄付されることが多いのだが⁽⁷⁾、これらのグレミオでは作成者が個人のものとして所有し、祭礼の度毎に貸し出すシステムを取り続けているのだと考えられる。

グレミオが所有する財産としてはエスタンダルテの他に、プロセッションで用いられるパベジョン（メキシコの国旗の意匠である蛇をくわえてサボテンにとまった鷲の絵の代わりに聖人聖母の絵を描いた大きな三色旗）、ミニ国旗、ろうソク、料理に用いる食器類、またそれらを入れておくための長持ちなどがある。ただ、表1からも分かるとおり、ほとんどのグレミオはエスタンダルテの他にはパベジョンとミニ国旗程度しか持っておらず、共有財産として食器や長持ちまで揃えているグレミオは非常にまれである。

ろうソクは消耗品であるため第二のタイプにも入るが、使い残したろうソクを共有財産として引き継ぐ対象にしているグレミオがいくつか存在する。たとえば、サンタ・エレナ村のグレミオは蜜蝋で作った黒いろうソクを所有しているが、祭礼で使い残したこのろうソクは翌年新しいろうソクに作り直すためにエスタンダルテなどと一緒に後任者に引き継がれる。また、ペトの第一農民聖イシドロ・グレミオも同様に蜜蝋で作った1メートルほどの巨大な黒いろうソクを持っている。ただし、このグレミオではこの黒いろうソクはまとめて全部翌年の主催者に引き継ぐのではなく、むしろメンバーに1本ずつ渡される。

そして、各メンバーが各自の責任においてロウソクを完全な形にして翌年の祭礼の際に持ち寄ることになっている。今日ロウソクは簡単に手に入るものだが、ロウソクが貴重品であった時代には、共有財産として引き継がれるべきものであったのだろう。⁽⁸⁾ チュマエルやテカントなどで見られる、祭礼で使い残したロウソク（燃えさしという意味で cabo と呼ばれる）を前任者から後任者にエスタンダルテと共に引き継ぐ慣習（el cabo 儀礼）はそうしたロウソクが共有財産であった時代の名残を留めるものだと言えよう。

祭礼の前任者から後任者に引き継がれるこれらタイプ1の品物はグレミオが祭礼を実施する上で必要とする耐久消費財である。その量と保管の形態によって長持ちのようなものが必要となる場合もあるが、グレミオが所有する財産目録は基本的には各グレミオがどのような儀礼行為を行うかによって決まる。しかし、それ以上に財産目録の違いを生み出す大きな原因となっているのは儀礼に必要とする品物が祭礼の実施においてどのような意味を帯びているかである。たとえば、ラミジェテは、元々は豚の頭料理に付けられる飾りだったものが、豚の頭が持つメタファーが変容する過程で独立し（後述）、主催職の移動を表わす儀礼に用いられるようになったものである。グレミオの中にはこうした主催職の移動とは関係なく、プロセッションを華やかにするための手段としてラミジェテを使用しているものもある。ラミジェテは本来祭礼終了後解体され翌年新しい材料で新調されるものであるが、こうしたグレミオではその必要がないように紙製の吹き流しを布のリボンに置き換えるなど耐久消費財化を図っている。

また、ロウソクが共有財産とみなされるのは、それがグレミオの資金すなわちメンバーが納めた会費で購入されたものだからである。実際、各メンバーが納める会費の額には差があることもあり、使い残しのロウソクをメンバーに公平に分配することの煩わしさを考慮すれば、共有財産として引き継いでいく方が合理的であると考えられる。では、なぜ一方でロウソクを共有財産とみなさないグレミオがあるのかと言え、それは、それらのグレミオでは主催者が個

人的にロウソクを購入しているか、あるいはグレミオ参加者が個人的にプロメッサの品として持ち寄っているため、残った場合には持ち主が持ち帰ってしまうからである。そうしたグレミオの中には各ロウソクに提供者の名前を書いた紙を貼り付け、平等に燃え残るようにロウソクの火を管理する事例さえ見られる。ロウソクを共有財産とみなすグレミオでは祭礼は構成員全員で実施するものであるという強い観念が見られるのに対し、これらのグレミオでは祭礼の実施は主催者の責任であり、その他のメンバーは彼／彼女に協力しているだけであるという考え方が支配的である。しかも、主催者の祭礼実施義務はグレミオの他のメンバーに対するものではなく、あくまで祭礼の対象である聖人聖母との関係において成立する個人的な信仰レベルのものである。人々はそれをプロメッサの問題として理解している。グレミオのメンバーは主催者が実施するプロメッサの場を借りて、個人的なプロメッサを実現しようとしているのである。それゆえ、ロウソクはグレミオ全体の責任において執り行う祭礼の道具であるというよりは、祭礼の参加者が個々に自らのプロメッサを実現するための手段とみなされているのである。

2. 非耐久消費財

祭礼主催の前任者から後任者に渡されるものには一旦消費され、翌年同等物が次の主催者に渡されるものがある。たとえば、豚の頭などの料理、ホッチリもしくはラミジェテと呼ばれる花飾りなどがある。これら第二のタイプのものは受け渡し後、一旦消費されてしまうが、受け取った後任者が一人で消費してしまうのではなく、多くの場合参集者に分配される。しかも、これらの引き継ぎ物を貰い受けた者は一年後に、貰ったものを二倍にして返すのが慣例となっている。たとえば、ホッチリにはパンやタバコ、人形などが吊るされているが、これらをもらった者は翌年、祭礼主催者がホッチリを作る際に同じ物を二つ返さねばならないとされる。また、ツイタス村のグレミオでは同じ原理の下に、使い残しのロウソクを参加者たちが貰い受けていく（拙稿 2002）。

表1において豚の頭料理とラミジェテの内、プロメサと記されたものは、聖人聖母に対する個人的なプロメサとして寄付されたものであることを意味し、祭礼職のシンボルとして主催者が提供したものではない。従って、これらのグレミオでは祭礼の期間中、豚の頭ダンスが行われることはあっても、豚の頭料理が祭礼の前任者から後任者へ贈られることはない。

表中の引き継ぎ料理とは役職者の引き継ぎに際して前任者が後任者に贈る料理である。それに対し、約束料理とは後任者が祭礼職を引き継いだ際にグレミオのメンバー全員に配る料理である。通常は、エスタンダルテが後任者の家に運び入れられた後で、参集者に簡単なタコス料理とオルチャタ（米をすり潰したペーストに砂糖などを加え、水で薄めた飲み物）が振る舞われる。参集者はグレミオのメンバーだけとは限らない。プロセッションに気が付いた村人がプロセッションに付いて後任者の家までやって来ることはよくあることである。約束料理はこうした人々に対しても振る舞われる。公言されることはあまりないが、この約束料理は後任者が翌年祭礼を実施する際に、メンバーでない人も含めた多くの人が協力してくれることを期待してのことであるようだ。⁽⁹⁾ すなわち、約束料理を貰った人は翌年祭礼に参加することで約束料理の提供者（祭礼の主催者）への反対給付を行うことが期待されている。興味深いことに、豚の頭料理以外の引き継ぎ料理を後任者に贈る習慣のあるショーケン村のグレミオとツイタス村のノホッチ・クーチではこの約束料理は配られない。これはおそらく、かつては、引き継ぎ料理を貰った後任者（複数）は自分たちの責任において翌年必ず祭礼を実施するという社会的な暗黙の合意が存在したが、多くのグレミオではそうした合意がもはや成り立たなくなり、協力してくれる人をメンバー以外にも求めざるを得なくなったためだと思われる。実際、約束料理を提供するグレミオの後任者は一人であり、祭礼を実施できなくなるリスクは、複数の責任者に引き継ぎ料理を贈与し、ある意味で危険を分散させているグレミオに比べて高いと言わざるを得ない。それゆえ、祭礼を実現する可能性を少しでも広げるための手段として約束料理がグレミオの他のメンバーさらにはメ

ンバー以外の人にも贈与されるようになったのだと言えよう。つまり、ショーケン村のグレミオとツイタス村のノホッチ・クーチは、後任者が自らの責任において祭礼を必ず実施するという社会的通念を持っている数少ない例なのである。

特にツイタス村のノホッチ・クーチは、祭礼実施に何らかの責任を負うことを同意した人たちだけで構成されたグレミオである。したがって原理的には、引き継ぎ料理を受け取った後任のメンバーが全員で祭礼実施の責任を負うことになるので、別途約束料理を配る必要はない。他のグレミオでも本来はメンバーが会費を出し合って全員の協力の下に祭礼を実施することを目指していたはずである。しかし、ユカタン・マヤ社会ではそうしたグレミオの運営方法は今日ほぼ完全に破綻している。では、なぜショーケンやツイタスなどの村のグレミオではそうしたメンバー全員の義務的協力による祭礼実施が可能なのであろうか。ツイタス村のノホッチ・クーチの場合で見てみよう。

図1はノホッチ・クーチにおけるモノの流れを概念化したものである。⁽¹⁰⁾ このグレミオには3人のクーチ（ノホッチ・クーチ、第二クーチ、第三クーチ）があり、各クーチはそれぞれ三人のノーシュを協力者に持つ。また、各ノーシュはそれぞれ別の三人のアンターと呼ばれる協力者を持っている。従って、このグレミオの成員は全部で48名である。楽団や打ち上げ花火代などプロセッションに必要な費用はこの48名に対して均等に割り当てられる。一方、引き継ぎの儀礼で用いられるラミジェテは各ノーシュがそれぞれ自前で購入する。また、このグレミオではアレパと呼ばれるトウモロコシのお菓子を聖母に供える伝統があるが、⁽¹¹⁾ その作成および費用負担は各クーチのグループの責任である。図1の概念図は主としてこのクーチ・グループにおけるモノの移動を表している。

広場や街路など村のパブリック・スペースを使って行われる引き継ぎ儀礼の最後に後任のクーチ(c2)は前任のクーチ(c1)からラミジェテと豚の頭料理を受け取る。⁽¹²⁾ ラミジェテは解体され、吊されていた人形やパンなどが人びとに配られる。これはグレミオの成員でなくとも希望すれば誰でも貰うことができる。この公の引き継ぎ儀礼に先だって、各クーチ(c1)は後任のクーチ(c2)とその協

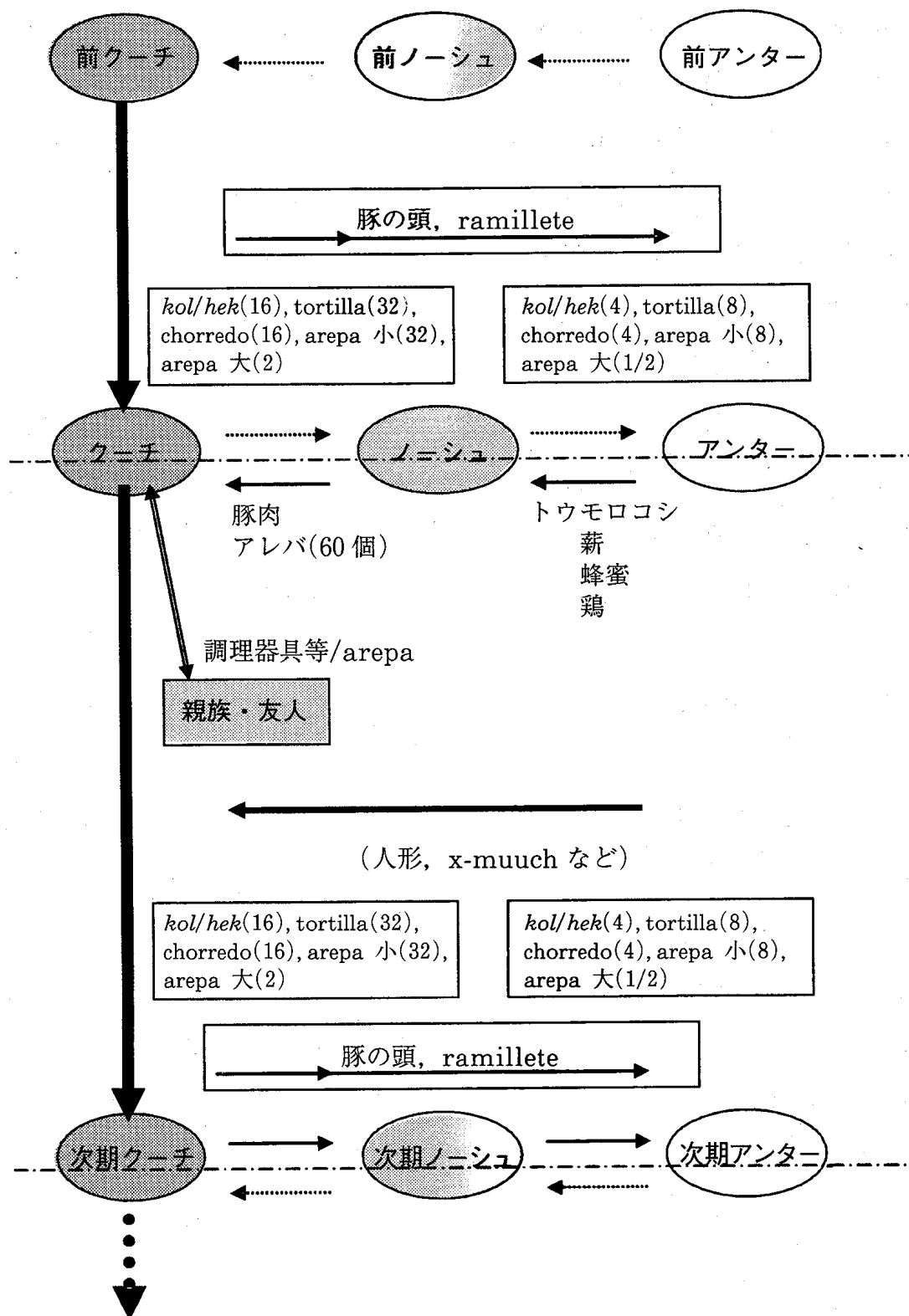


図1 ノホッチ・クーチにおけるモノの流れ

力者であるノーシュ 3 人、およびそれぞれの妻を自宅に呼ぶ。クーチ(c1)は新クーチ(c2)と新ノーシュ 3 人にそれぞれ、七面鳥料理のコールをカップ16杯、トルティージャを32枚、紫色のトウモロコシとカカオで作った飲み物のチョコレート⁽¹³⁾をコップ16杯、トウモロコシのお菓子アレパ小を32個、アレパ大を 2 個ずつ渡す。そして料理を受け取った新クーチ(c2)と新ノーシュは銘々の家に戻り、各自の協力者である 3 人のアンターとの間で前任のクーチ(c1)から贈られた料理を均等に分け合う。

こうした料理の受け渡しおよび分配は参集者全員の目の前で、しかも全員が納得するようにきちんと計測しながら行なわれる。さらに、翌年後任者(c3)に渡すこれらと同じ料理を作るに当たって、ノーシュたちは決められた量の豚肉をクーチ(c2)に納めなければならない。これはクーチ(c2)が前年度前任者のクーチ(c1)から受け取った引き継ぎ料理をノーシュに分配したことに対する、ノーシュからクーチ(c2)への反対給付の一部をなすものであるが、これもやはり厳格な手続きで行なわれる。各ノーシュはそれぞれ豚の前足 1 本、後ろ足 1 本、もも肉 1 片、あばら肉 1 片、背骨全部、脂身 4 分の 1 を持ち寄る。肉が全部で 4 Kg になるまで足からそぎ落とされ、残りは持ち主に返される。全部で 12 Kg の豚肉と 3 本の背骨が集められることになるが、これらはそれぞれ 4 等分され、3 人のノーシュとクーチ(c2)がそれぞれ 4 分の 1 ずつを受け取る。すなわち、クーチ(c2)は前年度分配した引き継ぎ料理への反対給付として各ノーシュから 1 Kg の肉と背骨 4 分の 1 を受け取ったことになる。料理用の肉をノーシュ全員がクーチの家を持ち寄り、そこから 4 分の 1 だけをクーチが受け取り、ノーシュもまたそれぞれ 4 分の 1 ずつ持って帰るのは、明らかに祭礼の実施がメンバー全員の共同作業で行われねばならないことを印象づけるためのものである。⁽¹⁴⁾

このノーシュからクーチへの反対給付として豚肉の納入には、「規則」違反が行なわれないようにノホッチ・クーチが必ず立ち会わねばならない。また、

傷んだ肉の納付も認められない。このようにクーチとノーシュとの間で執り行なわれる消費財の贈与交換が正確な計測と厳格な監視の下に行なわれるのは、必ずしも贈与物とそれへの反対給付が等価であることを意図しているからではない。むしろ、そこに参加する全ての人々にとって贈与あるいは反対給付という行為が全員の納得の上で行なわれることを保証するためのものだと言えよう。すなわち、ノホッチ・クーチにおける贈与交換は必ず実現されるべきものであるという認識がノホッチ・クーチ参加者全員に共有され、ハビトゥスとして前任の役職者から後任の役職者に受け継がれていくのだと言えよう。2002年の論文でも述べた通り、料理の贈与とそれへの反対給付としての豚肉の献上はあくまでシンボリックな行為である。むしろ、そうしたシンボリックな行為を通じて後任の役職者に贈与するための料理が作られる。つまり、ノホッチ・クーチにおける引き継ぎ料理の贈与は、祭礼を実施する後任の責任者グループ48名選出のメタファーに他ならないのである。実際このグレミオではメンバーが一人でも欠けることは許されない。そのためノホッチ・クーチでは2つの儀礼（聖週間の土曜日のチュク・ヘル儀礼と12月23日のカー・イック儀礼）を通じて役職者たちの意志および経済力がチェックされるのである（拙稿 2002:75）。ショーケン村のグレミオではこうした意思確認の儀礼は行われませんが、引き継ぎ料理が果たす役割はほぼ同じである。前任者から後任者に贈られるものの内容は違いこそすれ、後任者は前任者と同じハビトゥスの下に祭礼を実施し次の後任者に自分が貰ったのと同じ贈り物をするのである。

これら二つのグレミオにおいて祭礼の実施はある意味で役職者だけの関心事であり、必ずしも村の人びと一般に対して協力を呼びかける筋合いのものではない。また、祭礼の実施は役職者自身の個人的な関心事であるがゆえに、村人も手を出す必要性を全く感じていない⁴⁵。だからこそ、この二つの村では約束料理が用意されることはないのだと言えよう。

3. レパートリーとしてのシンボル群

本節では、祭礼職の引き継ぎにあたって前任者から後任者に渡されるものを、エスタンダルテのような耐久消費財と、料理に代表される非耐久消費財に分けて見てきた。耐久消費財の受け渡しは主催義務ないしは権利が実質的に前任者から後任者に引き継がれたことをグレミオのメンバーに知らしめる効果があるという点で、引き継がれるものは明らかに主催職のシンボルとして機能する。ところが、引き継ぎ料理やラミジェテは必ずしもそれ自体が主催職をシンボライズするわけではない。むしろそれらはその分配に与った者に構造化された返礼義務を負わせるという意味において、祭礼主催義務のメタファーとして機能するのだと言えよう。⁽¹⁶⁾ 約束料理もそれを受け取った人々になにがしかの返礼の義務感を抱かせる点では、料理を贈与する側と贈与される側との関係性の内に祭礼の実施を構造化するものである。しかし、約束料理はその贈与者が翌年祭礼を実施する上での責任を、贈与を受ける側の人々に均等に配分したものでもなければ、返礼を強制できるような類のものではない。なぜなら、コルなどの引き継ぎ料理は祭礼という機会に多大な労力をかけて作られ、また祭礼においてのみ消費されるものであり、料理を贈与された者がそれを自分の都合で自由に返却することはできないからである。返却するためには翌年の祭礼を待つしかない。ところが、約束料理のタコスやオルチャタは日常的な食べ物であり、返そうと思えばいつでも返すことができる。また、約束料理は不特定の人物に対して配られるものであり、必ずしも与える側と貰う側とのパーソナルな二者関係の内に返礼を強制することを期待したものではない。むしろ、不特定の多数に対して強制されない返礼としての協力を呼びかけたものなのである。それは祭礼主催義務というよりは祭礼主催の可能性のメタファーであると言えらるだろう。

豚の頭料理は本来ユカタン・マヤ社会の祭礼主催者引き継ぎにあって、主催者の交代（すなわち主催職の移動）を表わすシンボルであると同時に、翌年後任者に引き渡されるべき主催義務のメタファーでもあった。しかし今日、豚の

頭料理を作ったり豚の頭ダンスを行ったりするグレミオは多数存在しても、豚の頭を役職者の交代と結びつけているグレミオは極めて少ない。むしろ、役職者の交代・引き継ぎはそれ以外のもので表象されることの方が圧倒的に多い(表2参照)。エル・カボは前述の通り、燃えさしのロウソクを後任者に引き渡す儀礼のことである。ただ、引き継ぎの儀礼をエル・カボと呼んでいるだけで実際には別のものが渡される事例もある。たとえば、サンタ・エレーナ村のグレミオでは使い残したロウソクや食器類は専用の長持ちに入れられ、長持ちには鍵がかけられた上で後任者に渡される。この長持ちの引き渡しに際して、まず前任者の家で、教会のサクリスタンが前任者から受け取った長持ちの鍵を後任者の家の若い娘の首にかけてやる。その後、女の子はコーチェ*k'ooche*と呼ばれる御輿に乗せられ、楽団が演奏するマーチの曲に併せて、長持ちと共に後任者の家まで運ばれていく。つまり、サンタ・エレーナ村における主催職引き継ぎ儀礼では、ロウソクの使い残しなどの共有財産を納めた長持ち、さらにはそれに掛けられる小さな鍵が主催職をシンボライズしているのである。

また、ホッチリ(ラミジェテ)は本来豚の頭料理に付いていた吹き流しの小さな飾りであったと考えられるが、このホッチリを独自のアイテムとして独立させ、しかも主催職の移動を豚の頭ではなくこのホッチリに表象させている事例がいくつか存在する。カンサカブ村やティシュペワル村のグレミオなどでは、ホッチリを前任者の家から後任者の家に運ぶ儀礼を祭礼最終日の早朝に執り行う。エスタンダルテなどは昼間のプロセッションで後任者の家に運び入れられるが、早朝に行なわれるこのホッチリ儀礼こそが主催職の移動を示すものと理解されているのである。こうしたホッチリが主催職交代のシンボルとなっていく過程は一方で、豚の頭料理および豚の頭ダンスが別の社会的意味を獲得していくプロセスでもあったはずである。特に、貰った料理に対するハビトゥス化された返礼として実施されてきた祭礼が、祭礼主催者と聖人聖母との間で交わされる個人的なプロメッサの問題として理解されるようになる中で(拙稿2002)、豚の頭は新たに登場したこのプロメッサの論理を実践する上での重要

な道具として積極的に利用されてきたようである。祭礼を主催するだけの経済的余裕を持たないメンバーが祭礼主催者に代わって豚の頭（実施には豚一頭丸ごと）をプロメッサとして提供する事例が多く存在することはこうした変化のプロセスを裏付けるものである。また、前任者から後任者に渡される引き継ぎ料理に代わって、一般の人々に配る約束料理が必要になったのも、ラミジェテが第三者に委託されるようになった（拙稿 2002）のも結局は、主催職の引き継ぎを独占的に表象していた豚の頭が複数のシンボル群に解体し、それぞれに独自の意味を獲得することが可能になったからに他ならないはずである。

今日のユカタン・マヤ社会の祭礼で用いられるものは、使い方こそ一様でないものの、品揃えはほとんど共通である。それはユカタン・マヤ社会の祭礼が共通の文化的レパートリーを駆使して実施されていることを示している。しかし、主催職を後任者に引き継ぐというハビトゥスの実践にあたって人々は、ある一定の意味を獲得した文化的資源を自動的に反復利用するのではなく、自分たちが置かれた状況に応じて、主催職を表象するのに相応しいものをそのレパートリーの中から選び取ってきた。しかも、この文化的資源の再構成の過程で、主催職シンボルと主催義務のメタファーは次第に切り離され、主催義務のメタファーもその意味内容を変化させて行かざるを得なかったはずである。そうした変化を生み出す契機となった主催職引き継ぎをめぐる人々の祭礼実践を次に見てみよう。

II. ハビトゥスとしての引き継ぎ儀礼

主催職引き継ぎのハビトゥスを理解するためには、引き継がれるものの特性を理解するだけでは不十分である。むしろ、引き継ぎという行為が実際にいかなる身体行為を通じて実現されるのか、すなわちその引き継ぎを実践する身体的行為の中で上述の引き継がれるものがいかにその行為と結びついているのかを明らかにする必要がある。前任者から後任者への主催職の引き継ぎは必ずい

ずれかの時点で完了しなければならない。そこでまず、引き継ぎは祭礼プロセスのどの段階で行なわれ、主催職の移動はどの時点で完了したとみなされるのかから、この身体行為としてのハビトゥスを考えてみよう。

ほとんどのグレミオではエスタンダルテが教会から後任者の家に運ばれた時点で主催職の移動は完了したとみなされる⁴⁷⁾。しかし、主催職の移動を完了するために別の儀礼行為を必要とする場合、あるいは主催職の移動とグレミオのプロセションはそもそも別個のものとみなされている場合などがある。前者の例としては先ほど挙げたサンタ・エレナ村のコーチェ儀礼やカンサカブ村のホッチリ儀礼などが該当する。後者の例としては、たとえばトゥンカス村のグレミオがある。そこではグレミオのプロセションは前任者の家と教会の間を往復する。そしてグレミオの祭礼が終了した時点で、エスタンダルテなどグレミオに帰属するさまざまな物品が前任者の家から後任者の家に運ばれるのである。

一般にグレミオでは祭礼の最後に、収支報告、翌年度の主催者の選出、前任者から後任者への引き継ぎを行なう。この3つが実施されて初めて主催者が完全に交代したとみなされる。ところが、グレミオの規模などさまざまな事情からこれらすべてを祭礼の最終日に実施できない場合がある。もちろん、前任者あるいは後任者が自分の都合でこれら引き継ぎ儀礼群を自由に行なっていていいわけではない。むしろ、主催者たちの個人的な都合に対処するために、これらの儀礼群の実施には時間的猶予が事前に設定されるのである。今日、後任者はほとんどの場合、約束料理を人々に振る舞わねばならないため、引き継ぎを行なう当日になって翌年の主催者になることを決定していたのでは、いくらタコスとオルチャタという簡単な料理だとは言え、それを準備するのは時間的、場合によっては金銭的にかなり無理がある。したがって、主催職の引き継ぎを完了するための上記3つの行為は、後任者による引き継ぎ物の受け取りが滞りなく行なえるように祭礼プロセスに配置しなければならないことになる。

たとえば、サンタ・エレナ村のコーチェ儀礼（長持ちの受け渡し）は必ずしも祭礼の最終日に実施される必要はない。コーチェ儀礼では長持ちを受け取っ

た後任の主催者がアロス・コン・レチェに参加した人々に振る舞わねばならないため、この儀礼を実施するには新任の主催者がこのアロス・コン・レチェの材料であるお米と砂糖を用意できていなければならないからである。サンタ・エレーナ村ではこうした後任主催者の都合を考慮した上で、コーチェ儀礼の実施には時間的猶予を与えているのである。また、フヌクマー村の自作農グレミオではエスタンダルテなどの引き継ぎは祭礼終了後、日を改めて別の機会に実施される。そのためエスタンダルテを運ぶプロセッションは前任者と教会の間を往復する。また、後任の主催者は祭礼の最終日に会員全員の話し合いによって選出される。後任の主催者になった人はその場で挨拶をし、翌年の祭礼実施に向けた協力を会員に対して呼びかける。しかし、前任者から後任者への主催職の完全な引き継ぎは後日行なわれる祭礼の決算報告まで待たねばならないのである。これは、このグレミオでは後任者選出のための事前の調整を一切せずに、祭礼の最終日に会員全員で話し合ってから後任者を決定する習慣があるため、後任の主催者が約束料理を準備する時間的猶予を与える必要があったからかもしれない。あるいは、イスなどの共有財産が増えてしまったことで、祭礼最終日にそれらをすべて後任者の家に運び込むことが物理的に不可能となり、引き継ぎを後日に回さざるを得なかったのかもしれない。いずれにせよ、サンタ・エレーナ村の場合と違って、フヌクマー村の自作農グレミオでは引き継ぎ完了の要素として、後任者の都合ではなく、収支決算を重視している。このグレミオの祭礼は大規模であるため、きちんとした決算報告を行なうには時間が必要である、と会計報告が後日行なわれる理由について会員は口を揃えて説明する。これは前任の主催者すなわち祭礼を実施した者の責任は重大であるという認識がハビトゥスとして会員の間で共有されていることを示すものである。

会員制をとるグレミオであれば、祭礼の終了後に必ず決算報告をしなければならない。正しい収支報告がなされなければ、会員が納めた会費は主催者によって着服された、すなわち、当該グレミオでは会員がプロメッサを行なう場が確実に確保されないとみなされ、人々はそのグレミオを退会してしまいかねない。

その意味で、祭礼を実施した者の他の会員に対する責任が重大であることを認識していないグレミオはないだろう。だが、後任の主催者が決定していても、翌年グレミオの祭礼が実際には行なわれないこともあり得ることを人々は経験上知っている。ユカタン・マヤ社会におけるグレミオでは帰属を変更することは決して難しいことではない。ましてや、あるグレミオが活動を停止した場合、そのメンバーだった人が他のグレミオに参加することに何ら不都合はない。すなわち、前任者の責任を追及したところで、翌年グレミオの祭礼が実施される保証は得られない⁽¹⁸⁾。それゆえ、多くのグレミオでは後任者が翌年確実に祭礼を開催してくれることの方に関心が寄せられるのである。サンタ・エレナ村のコーチェ儀礼実施における時間的猶予はそうした翌年の祭礼を実現するための戦略の中から生まれた後任者への譲歩なのだと言えよう。それに対して、フヌクマー自作グレミオでは敢えて前任者の責任を重視する戦略を取っている。これは、多くのグレミオとは対照的に、このグレミオが強固な会員組織を基礎として祭礼が毎年実施されているからに他ならない。このグレミオでは会員を世襲制にすることで会員数が減ることを抑制し、また併せて祭礼主催者の経済的負担を最小限に抑える様々な工夫を凝らすことで、後任の主催者が祭礼の実施を放棄することを防いできたのである。それゆえ、このグレミオでは後任者の都合で引き継ぎが遅れたという言説を使う必要は全くないし、むしろユカタン・マヤ社会に蔓延していったそうした言説を抑制しようとする意識がこのグレミオのハビトゥスの一部となっているのだとさえ言えよう。

一般に、引き継ぎを完了させるために必要な上記3つの手続きは祭礼プロセスとの関係で見た場合、祭礼最終日を境にして事前、祭礼最終日、後日の3つの候補から選択組み合わせることができる。

	事前(1)	祭礼最終日(2)	後日(3)
後任の選出(S)	○	○	×
収支報告(A)	×	○	○
引き継ぎ物の受け渡し(P)	×	○	○

後任の選出をS、収支決算報告をA、引き継ぎ物の受け渡しをP、またそれらが行われる日時を祭礼最終日以前が(1)、最終日が(2)、最終日よりも後日が(3)とした場合、組み合わせの可能性としては、S1-A2-P2(I)、S1-A2-P3(II)、S1-A3-P2(III)、S1-A3-P3(IV)、S2-A2-P2(V)、S2-A2-P3(VI)、S2-A3-P2(VII)、S2-A3-P3(VIII)の8通りが可能である。ただし、慣習上、収支報告が引き継ぎ物の受け渡しよりも後に行なわれることはない¹¹⁹ので、A3-P2の組み合わせ(III、VII)が選択されることはないと言っていいだろう。また、祭礼最終日に後任の主催者を選出して同じ日にその他の引き継ぎ儀礼を終了させることは論理的には可能であっても、物理的に不可能であるため、S2-A2-P2(V)も実質上選択肢から外れる。従って、後任者を事前に決定しておいて祭礼最終日にその他の引き継ぎ儀礼を完了させるタイプI、同じく後任者を事前に選出しておいても引き継ぎ物の受け渡しだけは後日に回すことを許すタイプII、また後任者は事前に決めておいてもその他の引き継ぎ儀礼はすべて祭礼終了後に行なうタイプIV、後任者を祭礼最終日に選出する場合には引き継ぎ物の受け渡しだけ後日に行なうタイプVI、収支報告と受け渡しを後日まとめて行なうタイプVIIIの全部で5通りの組み合わせが可能である。ただ、後任者を祭礼最終日よりも前に決めておくのは祭礼最終日に主催者の引き継ぎを完了させる(タイプI)ための特別措置であり、引き継ぎ物の受け渡しを後日行なうタイプでは後任者が祭礼最終日以前に選出されているか否かはさほど重要な問題ではない。おそらくユカタン・マヤの人々にとってタイプIIとタイプVI、およびタイプIVとタイプVIIIはそれぞれ相同形である。したがって、今日のユカタン・マヤ社会では、引き継ぎ儀礼はI、II/VI、IV/VIIIという3つのいずれかの形態をとると考えて差し支えないだろう。ほとんどのグレミオはタイプIの方法で引き継ぎを完了させている。タイプII/VIにはサンタ・エレーナ村のグレミオ、タイプIV/VIIIにはフヌクマー村自作グレミオなど極めて少数の事例が見出されるだけである。

しかし、前述の通り、グレミオの引き継ぎはエスタンダルテを教会から後任者の家に運び込むことで完了する場合と、ロウソクの使い残しや食器などその

他の共有財産を別途後任者の家に運ばねばならない場合とが存在した。また、エスタンダルテのプロセッションが前任者の家から出発して教会に入り、翌日後任者の家に向かうのであれば、エスタンダルテの移動は必ず祭礼最終日に行なわれることになる。ところが、プロセッションのルートには前任者（その年の主催者）の家と教会とを往復するものがある。この場合、エスタンダルテは別途後任者の家に運ぶ必要が生じる。ただ、その場合には、二度手間を避けるため、エスタンダルテとその他の共有財産は通常は同時に運ばれる。

したがって、グレミオの引き継ぎ儀礼は、こうした要因が働いて、I, II/VI, IV/VIII がさらにいくつかのサブタイプに分かれることになる。プロセッションが前任者宅～教会～後任者宅のルートで行なわれるものをa, 前任者宅～教会～前任者宅のルートを通るものをbとすれば、タイプIaにはエスタンダルテの運び入れですべての引き継ぎが完了するもの(Ia1)とそれ以外の引き継ぎ儀礼を行うもの(Ia2)がある。タイプIa1は今日最も多く見られるものである。タイプIa2にはカンサカブ村のグレミオのように主催職の移動を示すためにホッチリ儀礼のような特別な儀礼を行なうグレミオが該当する。

ユカタン・マヤ社会では主催職の引き継ぎを表すためにもともと豚の頭ダンスが踊られていた。そうした主催職引き継ぎのハビトゥスがグレミオという新たな祭礼の場で実践されることになったとき、豚の頭とエスタンダルテとの間で「移動」の表象をめぐるシンボル体系に混乱が生じたと推測される。解決策としては、主催職の移動表象をエスタンダルテに集約するか、豚の頭に代わるもっと明示的な新たな移動表象を作り出すかのいずれの方法が可能であったはずである。Ia1の場合、エスタンダルテの運び入れが豚の頭ダンスおよび豚の頭料理の贈与に代わって実質的な主催職の移動を表わすようになっている。それは結果として、主催者ではなく通常の会員がプロメッサとして豚の頭を祭礼に寄進するようなハビトゥスを生み出す契機となったのだと考えられる。それに対して、タイプIa2は主催職が表象するものはエスタンダルテが表象するものとは別個のものであるとする論理ないしはハビトゥスをあくまで貫こうとし

た例だと言えよう。

なお、タイプ II/VIa と IV/VIIIa の方法が実際に実施されるとすれば、エスタンダルテを祭礼最終日に後任者の家に運び入れておいて、後日残りの共有財産を別途運ぶことになるため、二度手間になってしまう。また、今日一般化している約束料理をどちらの機会に出せばいいかという問題が生じるため、通常このタイプの引き継ぎは行なわれない。

プロセッションが前任者宅と教会の間を往復する場合には、エスタンダルテを別途後任者の家に運ばなければならないが、エスタンダルテとその他の共有財産を別々に運ぶことは、タイプ II/VIa および IV/VIIIa の場合と同様の理由から、行なわれない。したがって、タイプ b の場合にはエスタンダルテとその他の共有財産は必ず一緒に引き継がれることになる。こうしたタイプ Ib の事例としてテカント村のグレミオがある。このグレミオでは教会からエスタンダルテを引き取って来た後、使い残しのロウソクと一緒にエスタンダルテを後任者の家まで音楽の演奏とともに運ぶ。これをテカント村ではエル・カボと呼んでいる。実質的にはエスタンダルテを教会から後任者の家に運ぶ途中に前任者の家に立ち寄っただけであるが、形式上は前任者の家で祭礼は終了したとみなされ、エル・カボは主催職の引き継ぎ儀礼として行なわれている。エル・カボを祭礼最終日ではなく、後日行なうことも不可能ではないが、その場合には会員にさらなる協力を要請しなければならない上、楽団を別途雇うための費用が発生する。こうした無駄を省くためにエル・カボは祭礼最終日に実施されるのだと考えられる。しかし、これが可能であるためには、共有財産が同日中に片づけた上で運んでしまえるほどの量である必要がある。これに対して引き継ぎ物の量が膨大であったり、引き継ぎ作業（収支決算報告を含む）になんらかの慎重さが要求されたりする場合には、引き継ぎは後日に回されることもあるのだと言えよう。タイプ II/VIIb（サンタ・エレナ村グレミオ）と IV/IIIb（フヌクマー村自作農グレミオ）はおそらくそうした配慮から Ib の変形として発生したはずである。

したがって、今日ユカタン・マヤ社会で行なわれる主催職の引き継ぎはIa1, Ia2, Ib, II/VIb, IV/IIIbのいずれかのパターンをとることになる。これらは、ユカタン・マヤ社会の人々が主催職の引き継ぎを儀礼的に表現するにあたって、祭礼を構成する伝統的なレパートリーを一定のハビトゥスに基づいて整序してきた結果である。しかし、アクセス可能な資源の利用において論理的に可能な方法の全てが実践されるわけではなく、ユカタン・マヤの人々のハビトゥスに適合しやすいものが優先的に試みられてきたはずである。そして、今日のユカタン・マヤ社会における祭礼ハビトゥスは、祭礼主催職引き継ぎに関する限り、明らかに $Ia1 > Ia2 > Ib > II/VIb > IV/IIIb$ の傾きを志向している。

おわりに

本稿では今日ユカタン・マヤ社会において祭礼職の引き継ぎという行為がどのように実践されているかをハビトゥスの観点から検討してきた。その結果、グレミオにおける祭礼職の引き継ぎは、その構成要素が祭礼プロセスのどの段階に位置付けられるかによって少なくとも3つのパターンを取りうることが分かった。1つは引き継ぎ物の受け渡しを祭礼最終日に完了させてしまう方法(I), 2つ目は収支決算報告など前任者の任務は祭礼最終日に終了させておいて、引き継ぎを後任者の都合に合わせて後日実施する方法(II/VI), そして3つ目は前任者の任務を祭礼最終日以降まで引き延ばし、その任期の終了を待って後任者への引き継ぎを実施する方法(IV/VIII)である。

また、エスタンダルテを運ぶプロセッションのルートが主催職の引き継ぎを行なう上でのパラメータに加わることによって、これら3つのパターンはさらにいくつかのサブタイプに分かれる。ルートが前任者宅～教会～後任者宅を結ぶ場合、主催者交代（引き継ぎ）の表象をエスタンダルテの運び入れだけに集約してしまうもの(Ia1)と、主催者交代を表象する特別の儀礼を実施するもの(Ia2)の二つのタイプが存在する。他方、プロセッションが前任者と教会の間

を往復する場合、エスタンダルテを別途後任者の家に運び入れる作業が必要になるが、これを祭礼最終日に実施するか後日に回すかで、3つのタイプに分けられる(Ib, II/VIb, IV/VIIIb)。

本稿で行なったこうした主催職引き継ぎパターンの一般化はあくまで行為の類型論であり、必ずしもグレミオそのものの分類を意図したわけではない。実際、ある引き継ぎパターンを踏襲してきたグレミオであっても、状況に応じて別のパターンを選択することが可能である。たとえば、サンタ・エレーナのすべてのグレミオが常にII/VIbの方法を取るわけではない。後任の主催者の都合によってII/VIbの引き継ぎパターンを取るだけであり、通常はIbの引き継ぎが行なわれている。しかし、各グレミオがある引き継ぎパターンをハビトゥスとして優先的に選択し続けた場合、上述の5つのパターンはかなりの程度である傾向を帯びて分布することになる。実際、筆者が知る範囲では、今日のグレミオが取る引き継ぎパターンは $Ia1 > Ia2 > Ib > II/VIb > IV/IIIb$ の分布を示す。すなわち、今日のユカタン・マヤ社会は主催職の移動をエスタンダルテの移動のみによって表象するハビトゥスを身に付けつつあるのである。

だが、個々のグレミオは単独でハビトゥスをそのように変化させてきたわけではない。グレミオの中にはメンバーの離合集散を繰り返して今日に至っているものも少なくない。そもそもグレミオは社会的仲間の離合集散の受け皿として新しく形成された社会集団である。したがって、ユカタン・マヤ社会における祭礼ハビトゥスはウィルスの如くグレミオ間を転移し、またそこでの実践において新たな変異体をも生み出してきたのである。²⁰つまり、各主催職引き継ぎパターンはグレミオという制度を通じて行なわれたハビトゥス実践の軌跡なのである。それゆえ、ある特定のグレミオの歴史的変化を跡づけるだけではユカタン・マヤ社会におけるハビトゥスの変異プロセスを理解することはできない。むしろ、主催職引き継ぎパターンすなわちハビトゥスの変異体の分布にこそ、ハビトゥスが辿った変化のプロセスが刻まれているはずである。そこで最後に、祭礼職引き継ぎ行為（ハビトゥス）の種類の分布から見た一つの仮説として、

ユカタン・マヤ社会の祭礼の変化について考察を加えておきたい。

冒頭で述べたように、主催職の引き継ぎを表象するためのもっとも伝統的なシンボルは豚の頭であった。ところが、グレミオという信徒集団の祭礼においてそのシンボルはほとんどエスタンダルテに取って代わられつつある。つまり、エスタンダルテが次第に主催職の移動をも表象するようになってきている。この変化は主催職引き継ぎのパターンにおいて Ia1 タイプが圧倒的多数を占めていることに如実に表れている。グレミオが主催者の交代を実施するための単なる機会ないしは制度とみなされている場合には、エスタンダルテは主催者のアクセサリーでしかなく、主催職そのものは別のシンボルによって表象されなければならない。そうした主催職移動の表象は、ある特定の個人が自らのプロメッサとして祭礼を実現することよりも、メンバーの間での主催職の引き継ぎというハビトゥスの下で祭礼を実現しようとする人々の姿勢となって現われるはずである。こうしたタイプのグレミオはかつてのエネケン栽培地域の周辺部（カンサカブ村やチュマエル村、チャパブ村など）もしくはその周縁部（テカントー村やペト村、ツイタス村など）に見出されることが多いという事実は、共同体観念の喪失が、主催職（義務）は引き継がれねばならないとするハビトゥスを弱めていった可能性を示唆しているのかも知れない。

主催者の呼称も引き継ぎ行為におけるハビトゥスのこうした変化を反映したものであると思われる。ユカタン・マヤ語では祭礼の主催義務およびその任にある人は「背負ったもの・背負わされた状態」を意味するクーチ(kuch)と呼ばれる。ところが、村祭りの運営が村の社会組織から完全に分離してしまっているユカタン州の北西部では、祭礼（グレミオを含む）の主催者をクーチすなわち義務を負った者で見なすこと自体が今日社会通念上成り立たなくなっている。そのため、村祭りの実施者はフィエステロ（祭り請負人）、またグレミオの責任者たちはプレシデンテ、セクレタリオ、テソレロといった、クーチが本来持っている義務の観念を必ずしも喚起しない、ある意味で中立的なスペイン語で呼ばれている。また、クーチという言葉が祭礼のコンテキストで使われる

場合でも通常は、主催者その人ではなく、主催者が聖人聖母との関係において負っている責任を指して用いられる。

他方、ユカタン州東部や南部ではクーチ（祭礼開催責任者）はスペイン語でインテレサード(interésado)すなわち「自分から望んだ人」と呼ばれる。インテレサードという言葉には義務といった意味合いは一切含まれていない。祭礼の責任者はスペイン語ではかつてカルガドール（「背負う人」）と呼ばれていたことが多くの民族誌で報告されているが、インテレサードよりもこのカルガドールの方がクーチの元々の概念に対応するはずである。インテレサードという用語がいつ頃から使用されだしたのかは不明であるが、ユカタン州東部や南部でも祭礼の主催者に義務という概念を適応することが社会慣習上相応しくなくなってきたことに対応して、カルガドールに代わってインテレサードが使用されるようになったものと思われる。こうした変化はユカタン・マヤ社会の祭礼ハビトゥスが、今日グレミオという聖人聖母信仰の制度を通じて実践されている現実を反映したものと言えるだろう。すなわち、聖人聖母に対してプロメッサを行なうことが祭礼を実施する上での重要なモチーフになっているのであり、祭礼ハビトゥスはそのモチーフによって成形されつつあるのである。

2002年の論考で筆者は、伝統的要素は近代化に伴って消滅するのではなく、むしろ新たな形で再生産されていく様子について報告した。ユカタン・マヤ社会において近代化がもたらした変化、特に村落レベルの経済活動への現金資本の流入は、こと祭礼に関してはそれまで祭礼の実施に働いてきた伝統的な規則を排除するのではなく、むしろ現金資本がその規則の体系の中に取り込まれ、伝統的な規則そのものを再生産する新たな力として作用したと言えるだろう。それは、構造の反復という観点から言えば、まさしく祭礼の論理としてのハビトゥスが人々の祭礼への取り組みを規定し続けていることを示すものだ。だが、そうした反復する構造から人々は常に同じ意味を取り出しているわけではない。むしろ、移りゆく社会的コンテクストの下で構造を反復させることは、配置されるものとその位置付けが持つ意味に変化をもたらすはずである。そして新た

な意味を獲得した行為は、次の行為に対する一つの指針としてハビトゥスの中に取り込まれるのである。⁽²¹⁾

注

- (1) 本稿の議論の元となったデータは主として1995年4月から1996年3月にかけて筆者が行なった現地調査に基づいている。
- (2) なぜカルゴが1年任期で前任者から後任者に引き継がれるのかに関してはマヤ起源とスペイン起源のいずれも考えられるが、その根拠は必ずしも明確ではない。
- (3) いわゆる宗教的行政的階梯性と呼ばれる社会組織がこの例外的な事例に該当する。
- (4) エスタンダルテにはその他にグループの名称や創設年、場合によっては寄贈者の名前が刺繍で織り込まれている。
- (5) プロセッションでは女性がグラジオラスなどの花やロウソクを手に持ち、打ち上げ花火(volador)を使ってエスタンダルテの場所を人々に知らせながら、楽団が演奏するマーチの音楽に合わせて参加者が行進する。マーチにはパソドブレのカジェ・ドセ(Calle 12)が演奏される。
- (6) ただし、特定の個人ないしはグループの「所有」であるグレミオではエスタンダルテも必然的にその個人もしくはグループの所有物であるが、そうしたグレミオでは主催職の引き継ぎが発生しないので、ここでは議論の対象外である。
- (7) こうしたエスタンダルテには寄贈者の名前と作成年が刺繍で織り込まれていることが多い。
- (8) ペトの巨大なロウソクはその修復を主催者という祭礼の責任者を介さず、一般会員に直接任せることで、会員権と引き替えに共有財産の保全を図ろうとした特別な事例である。
- (9) 今日のユカタンのグレミオのほとんどは厳格な会員(socio)制ではなく、中核となる個人や少数の集団が非会員の協力を得ることで運営されている。その意味では、グレミオのメンバーとプロセッションに付いてきた一般の村人との間に大差はない。
- (10) モノの流れには労働力の提供も含まれる。特に、下位の役職者が上位の役職者に対して提供するものには労働力が含まれる。
- (11) 形式上は、第二クーチと第三クーチが自分たちの作ったアレパを筆頭のノホッチ・クーチに上納し、ノホッチ・クーチの責任において聖母に供えられるが、ノホッチ・クーチも第二・第三クーチと同様にアレパを作成する。
- (12) 開催年度によって前任クーチと後任クーチは別の人物を指す。本稿の議論では複数年に渡る引き継ぎを扱うことになるため、以下、クーチにはc1, c2, c3の番号を付けることとする。c2はc1の後任者であるが、c3にとっては前任者でもある。

- (13) クーチ(c2)はこの他にヘークという七面鳥料理と小さなアレパを8個余分に受け取る。
- (14) この豚肉料理そのものは後任の役職者(c3)らに渡されるわけではなく、むしろ引き継ぎ料理の作成を含めた祭礼の実施に協力してくれた人々全体に振る舞われる。
- (15) これらの村でクーチあるいは役職者一般がインテレサード(「自分から望んだ人」)と呼ばれるのは、こうした事情を反映したものと言えよう。
- (16) 役職の上位者はこの象徴資本を下位者に贈与することで、翌年料理の材料や労働力などの反対給付を得る。従って、形式上、ノーシュはクーチ、またアンターはノーシュないしはクーチに対して直接の返礼義務を帯びる。しかし、これらの小さな返礼を統合する形でクーチ(c2)が実施する返礼は前年度料理を受け取った相手(c1)ではなく別の人物(c3)に向けられる。すなわち、クーチ間の贈与交換は限定交換ではなく、必ず第三者に渡される一般交換である。
- (17) ただし、祭礼(共食およびダンスなど)は参集者が辞去するまで後任者の家で続けられる。この場で、ラミジェテが解体され人々に配られる。
- (18) 収支決算はあくまで祭礼を実施した個人の社会的資質を評価するためのものである。
- (19) ただし、筆者がそういった事例を知らないだけかも知れないし、また論理的かつ物理的に不可能ではないので、将来こうした方法が登場することまで否定するわけではない。
- (20) 祭礼資金を調達するために他村のグレミオとの間で代表使節を交換しあう慣習もまた、こうしたハビトゥスの伝播および変異に一役買って来たはずである。
- (21) ブルデュはハビトゥス論を展開する中で、その共有はアイデンティティの形成につながると論じる。本稿で取り上げたユカタン・マヤ社会の祭礼ハビトゥスの変化はアイデンティティの観点から言えば、近代化の下でのアイデンティティのゆらぎとみなすことも可能である。しかし、ハビトゥスを共有しているからといって、それに基づいた行動を取る人たち全員が、利害を共有するある社会集団に属しているとは見なすことはできない。むしろ、ハビトゥス(文化的構造)とアイデンティティとを結びつける議論には論理の飛躍が必要である。少なくともそこにはハビトゥスを共有する集団がアプリアリに想定されなければならない。あるいは、あるアイデンティティを共有していることを事実として述べるために、ハビトゥスが持ち出されるのだと言えよう。グアテマラ・マヤにおける文化的スキームの継承を論じたエドワード・フィッシャー(2001)のカルチュラル・ロジック論は、まさにローカルなアイデンティティの共有を超えた新たなアイデンティティの形成を目指している点において、ブルデュが試みたこのハビトゥスとアイデンティティとの接続の冒険に他ならない。本稿で取り上げたユカタン・マヤ社会の場合、あるレベルとある機会にアイデンティティが共有されることはあるかもしれないが、祭礼ハビトゥスを通じてアイデンティティが共有されることはない。

参考文献

ブルデュ, ピエール

1988 『実践感覚1』 今村仁司・港道隆共訳, みすず書房

Fischer, Edward F.

2001 *Cultural Logics and Global Economies: Maya Identity in Thought and Practice*. Austin: University of Texas Press.

Hervik, Peter

1999 *Mayan People Within and Beyond Boundaries: Social Categories and Lived Identity in Yucatán*. Amsterdam: Harwood Academic Publishers.

Irigoyen, Renán.

1973 *Calendario de Fiestas Tradicionales de Yucatán*. Mérida.

Quintal Aviles, Ella F.

1993 *Fiestas y gremios en el oriente de Yucatán*. Mérida: Gobierno del Estado de Yucatán/Consejo Nacional para la Cultura y las Artes /INAH/Patronato de las Unidades de Servicios Culturales y Turísticos del Estado de Yucatán.

1996 Formas organizacionales del catolicismo en Yucatán. *Revista de la Universidad Autónoma de Yucatán* Vol. 11. No. 197. pp.53-67.

1997 Sistemas de normas, reciprocidad, reproducción cultural: fiestas en el Oriente de Yucatán. En Krots Esteban (coord.) *Aspectos de la cultura jurídica en Yucatán*. Mérida: Consejo Nacional para la Cultura y las Artes/ Maldonado Editores.

Redfield, R.

1941 *The Folk Culture of Yucatán*. Chicago: University of Chicago Press.

Redfield, R. and A. Villa Rojas.

1962 [1934] *Chan Kom: A Maya Village*. Chicago: University of Chicago Press.

田辺繁治

2003 『生き方の人類学—実践とは何か』 講談社

吉田栄人

1987 「ユカタンにおける現代グレミオとその儀礼」『ラテンアメリカ研究年報』第7号, 1-37頁

1990 「カルゴの循環と停滞—カルゴ・システム研究への非階層の視点」『民族学研究』第55号2巻, 172-192頁.

- 1994 「祭りと聖人信仰—ユカタンの事例から」『ラテンアメリカ 宗教と社会』 G. アンドラーデ/中牧弘允編, 135-154頁, 新評論.
- 1995 「先住民社会の祭礼と政治」『メソアメリカ世界』 小林致広編, 183-232頁, 世界思想社.
- 2002 「メキシコ・ユカタン州における祭礼の近代性」『神戸市外国語大学外国学研究』 第52号, 67-95頁.